

島でまなび、
島でおしえ、
島をかんがえる。



誰もが先生、誰もが生徒

三宅島大学の試み 五十嵐靖晃「そらあみ - 三宅島 -」を事例に

誰もが先生、誰もが生徒

三宅島大学の試み 五十嵐靖晃「そらあみ-三宅島-」を事例に





師匠のベテラン漁師「じい」と五十嵐靖晃



三宅島大学 キックオフ講座「島でまなび、島でおしえ、島をかんがえる。」
講師：加藤文俊（慶應義塾大学教授）



講座「いろいろな地図・それぞれの地図」
講師：長島確（アトレウス家プロジェクト主宰）



「三宅島大学キッズリサーチ」講師：加藤文俊研究室（慶應義塾大学）

五十嵐靖晃「そらあみ - 三宅島 -」

2012.10.01-10.22



アーティストプロフィール



五十嵐 靖晃

いがらし やすあき

1978年 千葉県生まれ

2003年 東京藝術大学卒業

2005年 東京藝術大学大学院修了

土地に住み、その日常に入り込み、そこで出会う人達と共に、普段の生活の中に新たな視点と人の繋がりをつくるプロジェクトを各地で展開している。

近年の活動

樟の落ち葉を掻いて集めて、かつて存在した千年樟を描き出すアートプロジェクト「くすかき」(2010～2012年太宰府天満宮)、舞鶴から新潟まで約30港に寄港し、漁師らとの交流や海上での経験を通して海からの視座で日本を見つめ直す航海を行った「種は船～航海プロジェクト from 舞鶴」(2012年京都・舞鶴)、参加者が共に漁網を編むことで、人を繋ぎ、記憶を繋ぎ、完成した網の目を通して土地の風景を捉え直す「そらあみ」(2013年瀬戸内国際芸術祭2013、六本木アートナイト2013他)等

三宅島入り

2012.10.01

22:20 竹芝棧橋発の東海汽船に単身乗り込み三宅島へ向かう。昨夜、関東地方を通過した台風 17 号の影響による余波が心配だったが定刻通り出港した。到着予定時刻は翌日の早朝 5:00。船中泊である。乗船者は少なく指定されたベッドのまわりは空いており、どの乗船客も暗黙の了解で指定番号を無視して、適度に距離をとって各々の場所を寝床とした。荷物を置いて甲板に上がると、船はちょうどレインボーブリッジの下を通過するところだった。東京タワーにスカイツリー、そして無数のビル群がきらめく東京の夜景に目を奪われ、しばし眺める。そしてそれはゆっくりと確実に音も無く小さくなっていった。船首の先に目をやると闇が広がっている。この黒い海のむこうに三宅島がある。風が強くなったので甲板を後にし、ベッドに潜り込むとすぐに消灯時刻 23:30 となった。途中、夜中に一度背中が波のうねりに押される感覚を覚え目が覚めた。東京湾を出て外海に出たのだとぼんやりと理解した。

船という乗り物は、静かにゆっくりと確実にその土地から離れていく。この乗り物は単なる移動手段ではない。人にとって安定し住み慣れた陸から、不安定で不慣れな海へ。身体的にも精神的にも別の世界へ連れていってくれる乗り物である。三宅島へ向かう船中泊は“陸で生まれ育ち、全てが当たり前であり、常識となり、それを疑わない、自らにこびりついた陸の感覚”を捨て去る儀式のように感じた。

早朝 4:55。辺りはまだ暗い。月明かりの中、三宅島に無事到着した。

三宅島は東京から南へ 180 km。伊豆諸島のほぼ中央に位置する島で、直径 8 km、周囲 38 km、面積 55.5 km² のほぼ円形をした火山島である。人口は 3000 人弱。

この島に来た理由は、三宅島大学の講師として“そらあみ”づくり体験講座を実施すること。

三宅島大学の説明を簡単にすると、

「三宅島大学」とは、三宅島全体を〈大学〉に見立てて、さまざまな「学び」の場を提供する仕組みです。それは、自然との長い関わりについて考え、私たちの「想う力」を育む場です。学校教育法上で定められた正規の大学ではありませんが、〈大学〉の講座やプログラムを通じて人びとが出会い、のびのびと語らう「学び」の場をデザインし、コミュニケーションの誘発を試みるプロジェクトです。(ホームページより)
www.miyakejima-university.jp

自分は昨年行われたリサーチプログラムに参加し、その時、三宅島で出会ったベテラン漁師さんに漁網の編み方を習った。一週間ほどの滞在期間、他のリサーチャーが島を回る中、自分は毎日ベテラン漁師さんの番屋に通い、ひたすら網を編み続けた。ベテラン漁師さんを「じい」と呼ばせてもらい、1 から網の編み方を教えてもらった。じいは網を編む師匠である。そして、じいから習った網づくりは、その後“そらあみ”となる。

“そらあみ”は、みんなで空に向かって大きな漁網を編み上げていくという作品で、京都の舞鶴や、岩手県の釜石市の仮設住宅などで展開し、地域の方の手によりそれぞれの“そらあみ”が完成した。

三宅島からはじまった物語を、報告も兼ねて一度、もどしてみようということである。



船上プレゼンの現場



軽自動車のトランクには当然のように網道具。
このカッチ（小豆色）が三宅島でよく使われているようだ





話を聞いてくれた漁師さんがいきなり編みはじめた



じいを遠くに見た。海と共にいた。少し痩せたように見えた



7 時の電話

2012.10.03

朝7時、電話が鳴った。昨日、港で会ったキタガワさんからだった。「台風で雨だし、動けないから、網編むぞ。そっちに場所あるか?」「え?え?あ、はい。場所あります」何の約束もしていなかったのですが、実はこの電話で起きたのだが、8時には網を編んでいた。

さらに、キタガワさんは地元の網漁師の78歳のベテランである「クニさん」を連れてきてくれた。クニさんは耳が遠いし歯がないのだが、さすが網漁師、網はとんでもなく編むのが早い。キタガワさんが大声で説明をすると、どんどん網ができていく。そして、キタガワさんは、やはり、ただの電気屋の社長ではなく、漁師をしていた頃もあったそうで、網も編めるのだ。

公表している“そらあみ体験講座”は10月6日からスタート予定なので、それまでにある程度編んで、形が見えてきてから、いろんな人に参加してもらおう段取りにすると、編みながら決まった。

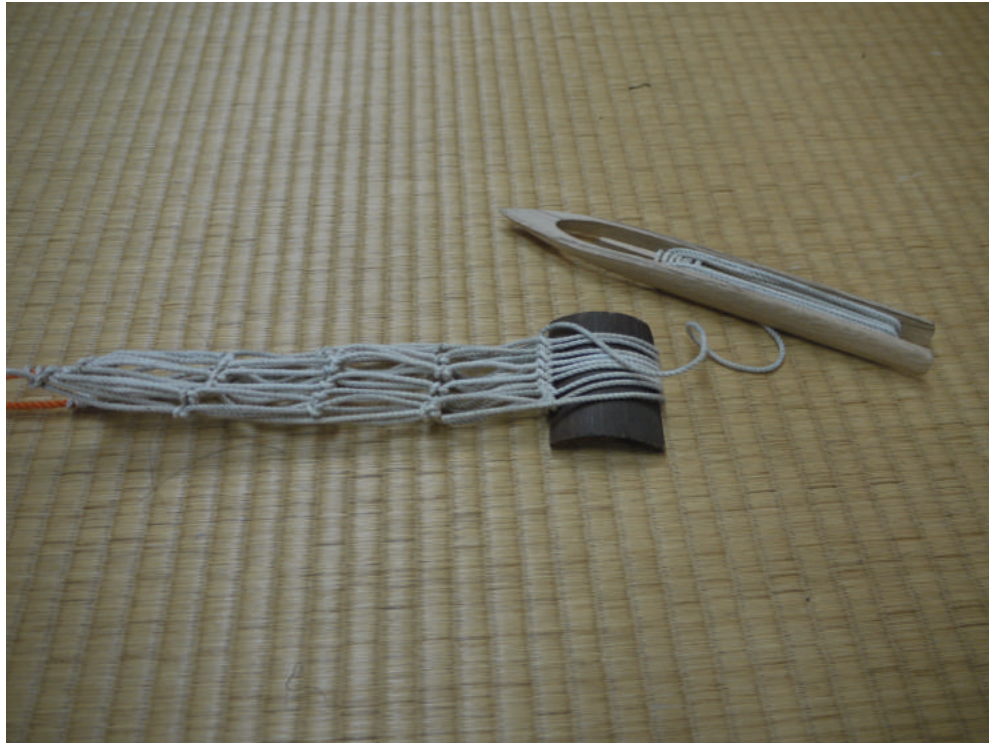
こうして、3人で夕方4時まで網を編んだのだった。

夕方、役所に行き、副村長さんや教育長さんにご挨拶。役所への挨拶と網制作、順番はあべこべだが、なんだかすごい展開である。三宅島に着いたのは昨日の朝だったのだが、昨日のうちに場所が決まって、今日、地元の漁師さんと台風の中、三宅島大学本校舎にて網を編みはじめている。今まで、さまざまな土地に入って行きプロジェクトを行ってきたが、こういった展開は、はじめてである。いったいどういう状況なのだろうか。一部ではあるが、島の方が、いきなりアクセル全開である。普通は多少土地に入ってから、関係性も含めて準備段階がある。なんだか、ずっと前からこの島にいたような錯覚に陥る。とにかく面白いことが起きている。

ひとつ言えることは“そらあみ”は、三宅島で、もうはじまっているということである。



朝の三宅島大学本校舎（御蔵島会館）
左：キタガワさん 右：クニさん



あばり（編み針）と、コマと、小さな漁網



キタガワさんとクニさんと3人で編む





カッチ (小豆色)、緑、オレンジ、黒、白。三宅島では、この5色で編んでいきます



三宅島大学マネージャーの猪股さんはクニさんの助手に



教授

2012.10.05

今日も朝早くからキタガワさんとクニさんが網を編みに来てくれた。ここ数日、我々3人が朝早くから日が暮れるまで網を編むモチベーションは、長い目で見たら最終日である10月21日に向けての“そらあみ”の完成はもちろんだが、明日の“そらあみづくり体験講座”の初日までにある程度の網を編んで、制作及び設置する現場となる阿古漁港の中棧橋に掲げ、講座の初日に来た人に見てもらおうという点にある。

キタガワさんが笑いながら言う。「俺、教授って言われちゃったよ」。最初は言っている意味がよく分からなかったが、どうやらここ数日、キタガワさんが顔を出さないから何をしているのか、普段よく会う周りの人が気になったらしく、どうやら三宅島大学に出入りしているらしいということが分かり（島では車で個人が判断できるため、三宅島大学本校舎に車が停めてあるから、車から所在が割れたらしい）、大学に出入りしているから「教授」ということになったらしい。自分からしたら、キタガワさんもクニさんも教授のような存在なので、三宅島大学本来の「島でまなび、島でおしえ、島をかんがえる。」というコンセプト的にはしっくりくるのだが、キタガワさんが教授と呼ばれる意味には別の側面もある。それは、島の人が、三宅島大学とキタガワさんの関係を観察しているということだ。そこには、まだ三宅島大学（今年の9月に開校したばかり）の全貌がつかまえない島の人にとって、何かおいしい話（例えば儲けに繋がるとか？）にキタガワさんが関わっているのではないかと、ひやかしのようだが、でも自分は距離を測っているようなものも含まれた感覚である。

キタガワさんは言う。「俺は、いろんな土地でお世話になってきたし、こうして誰かの何か、困っている何か、自分が力になれる何かを協力してやったら、いずれどこかで必ず自分に返ってくる。俺、今まで海外旅行に行っても、どこの国でもみんな良くしてくれたし…。当然のことだろ。こんなんは、損得じゃないし。そらあみを三宅じゃできなかった、三宅の人は協力的じゃなかったなんて、他の土地で言われたくもないしな」

島には島の事情がある。島には島の付き合いがある。それを、どうこうすることなど自分にはできないし、するつもりもないが、そうでない、しがらみのない運動体として、外から来た役割としての刺激を“そらあみ”を通して起こすことができるかどうか、ここでの仕事である。

明日が、講座の初日である。昼前に網を編む手を止めて、キタガワさんと網を空に掲げるための竹を切りに行くことになった。キタガワさん独自の島ネットワークで押さえてくれた竹の在処へ向かう車移動の途中、キタガワさんが言う。「五十嵐くん。昨日あれからずっと考えたんだけど、竹も良いけど、ワイヤーを張ってみるのはどうだ？」今まで“そらあみ”でワイヤーを使って設営をしたことはない。はじめてのことだし、島の人からの意見だし、スッキリと今までにない見え方がしそうだし。しばし考えて、そうしてみることにした。

竹ポイント（坪田地区）まで行って、そのまま引き返し、道具を準備すると言って、キタガワさんは行ってしまった。三宅島大学本校舎に戻って、クニさんと2人で網を編んでいると、昼過ぎにキタガワさんが



滑車にロープをとりつけてくれました。仕事が早い



網もだいぶ量感が、迫力が出てきました



そらあみ体験講座初日

2012.10.06

朝6時、キタガワさんとクニさんと三宅島大学マネージャーの猪股さんと、今日までに編み進めた網を持って、4人で“そらあみ”設置場所である阿古漁港の中棧橋へ、電気工事で使用する高所作業車をキタガワさん（電気会社社長）が用意してくれ、高く張られたワイヤーに滑車を設置し、網をつり上げた。編みかけの網は設置空間に対して、まだ小さく感じるが、網が掛けられただけで、中棧橋の見え方がガラリと変わったのが分かった。近くにいた漁師さんが言う。「なんだこの網は？まだ中途半端じゃねえか」五十嵐「はい。これから10月21日の完成に向けて編みます。是非ご協力ください」漁師さん「ふーん。そうか」この場所に設置することに、十分な効果があることが実感できた。三宅島はこれからエビ漁が始まる。三宅島でエビは伊勢エビを意味する。エビ漁で使う網は今回そらあみで編んでいる網と網の目のサイズが似ているようで、漁師さん達はそらあみを見てエビ漁の話をする人が多い。ここ中棧橋は最も網との距離が近く、網の専門家達である漁師さん達が集う場所。みなさんに是非気にしてもらいたい。これからどんな出会いが待っているのか楽しみである。

10時、三宅島大学本校舎（御蔵島会館）にて、そらあみづくり体験講座を実施。10数名の方が来てくださり、思っていたよりも参加者が多く、良い雰囲気講座が行われた。簡単な自己紹介と、三宅島をきっかけにはじまった“そらあみ”が各地で展開したことと、三宅島に帰って来た経緯、作品コンセプトなどを伝え、早速、網づくり体験。そこには網専門のベテラン漁師であるクニさんも来てくれた。クニさんを皆さんに紹介すると少し恥ずかしそうにしていたが、みんなの前でガンガン網を編んで見せてくれ、あまりの手の動きの早さに皆さんしばし見とれるといった、面白い時間が流れた。

参加者の中には、以前から漁師さんの網の編み方に興味があったという小学校の社会科の先生がいたり、冬場は外に出られないから、激しい運動ではない、こういったことをみんなで作れるといいといった主婦の方がいたりして、編みながら、島の発信でハンモックやバッグなど商品開発したら良いんじゃない？といった意見も出た。皆さん真剣に網の編み方を覚えようと、覚えた人がまた隣の人に伝えながら、全員が一通り体験し編めるようになった頃には、2時間の講座は残すところあと30分となっていた。

最後は、みんなで中棧橋にお散歩しながら移動し（徒歩5分程度）、空に掲げられた網を眺めた。おお！感嘆の声が上がる。天気も良く、そらあみは気持ち良さそうに、この土地の風景に入り込んでいた。近づいて行きながら一步一步見え方が変わる。そらあみの見え方の面白い点は、網なので斜めから見ると色が濃く存在感があるのに、正面から見ると透けて向こうが見えるという、ないのにあるような、あるのにないような、その土地に馴染みつつも違和感があるような、そんな不思議な存在感にある。

五十嵐「みなさんは、今日の講座で良い編み手となりました。このそらあみを完成させるに、是非またこの中棧橋までいらしてください」



朝 6 時の中棧橋にて、滑車の取り付け作業中



幅は約 10m





昨日までに編み上がった分を朝の三宅島の空へ



そらあみ体験講座の風景





地元ベテラン網漁師のクニさんは教授です



家族で参加してくれました





風に吹かれて気持ち良さそうにしています



編む個性

2012.10.07

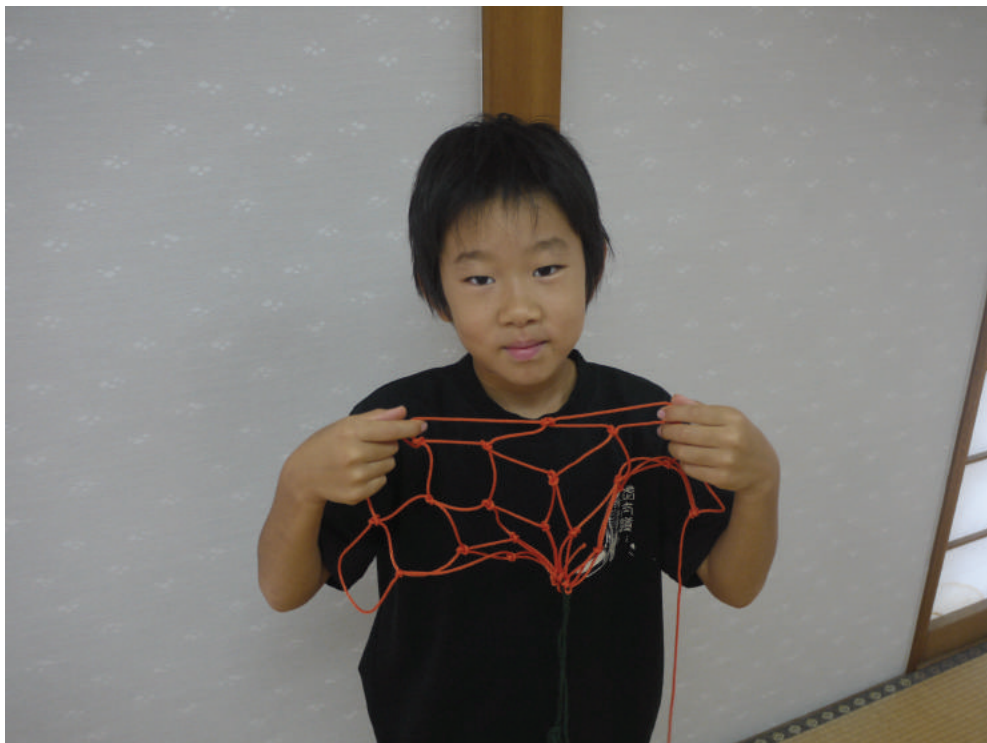
今日(10月7日)は1日雨だったので、三宅島大学本校舎(御蔵島会館)で網を編んだ。午後からクニさんも編みに来てくれた。三宅島の動きとしては、小中学校合同の運動会の予定だったが雨で翌日に延期となったため、時間ができた小学生やお母さん、先生などもちろはらと顔を出して下さり、何人かの島の人と知り合いつつ網の編み方を伝えた。

小学2年生の少年も、福祉関係の仕事をしている大人も、1本の紐が自分の手元で網模様としてつながり、確実に広がっていく様子には同じように感動を覚え、達成感を得る。網は正直である。一段ずつ編み進めていくのだが、一段を編み終えてコマ(網の目の間隔を均等にするためのゲージ)を外すと、ちゃんと編めていたのかどうか分かる。間違えていたら、どこが間違えているのか一目瞭然なので、間違えた所まで紐を解いてやり直すしかない。誰のせいにもできないし、自分がどこでどう間違えたのかその軌跡が目の前に現れる。単純作業であるが故に、慣れてくると編むリズムや道具や紐が体に馴染んでいくのが分かる。その奥深さにはまり、これ系の作業が好きな人にはたまらなく楽しい時間となる。「これ、はまるわ～」と声が出ると、自分も同じタイプなので、思わずニンマリしてしまう。

そして性格も出る。体が覚えるまで何度でも繰り返し反復する人、何故そうなるのか?理屈で原因を追求する人。ただ単に網を編むだけなのに、その向き合い方に個性があり、編まれた網にも手跡としての個性が見てとれる。そんな個性の集合体であり、1枚の大きな網となった“そらあみ”はなんだか関わりたくなる存在なのである。



は一くんに編み方を伝えました



上手に編めました



土地に飛び込む

2012.10.08

朝9時、クニさん登場。昨日雨だったので三宅島大学本校舎内で編んだ網を阿古漁港の中棧橋に設置してある“そらあみ”と一緒につなげに行った。そらあみ体験講座に参加してくれた田中さんや、浅井さん、浅井さんの友人も駆けつけて来てくれた。ああだこうだと言いながら、みんなで作業をしていると、いつのまにか漁師さんが集まってきていた。

1人の漁師さんが言う。「おう、組合長（クニさんは元組合長）、何してるんだ」

クニさん「三宅島大学で網を編んでるんだ」

別の漁師「なんでえ、良い仕事見つけたな」

クニさん「仕事じゃねえよ。ボランティアだよ」

また別の漁師「じゃあ金は出ねえのか、なんでえ」

最初はこんな感じで遠巻きに見て、野次を飛ばしてくる。

また別の漁師「エビ網にも使えねえな。つぎはぎだらけだしよ」

またまた別の漁師「どうせなら定置網の網を編んでくれたらいいのによ」

五十嵐「三宅島大学って言って、三宅島の魅力を見つけて発信していこうというのをやってるんですよ。自分は網を編むのが面白いと思って、みんなでこうして参加してもらって、いろんな色で網を編んで、ここにこうして、網で埋めようと思って。協力お願いします！」

漁師さん「全然生徒が集まってねえじゃねえか。なあ教授（クニさんを見ながら言う）」

クニさん「教授じゃねえよ。でも、そうなんだよ。生徒が来ねえんだよ」

この講座は一昨日開講したばかりなので正直まだ認知度は低いし、参加者も少ない。

またまたまた別の漁師「だったら、ほらあその船の船長も編むのが上手だぞ」

五十嵐「え、ほんとですか？ 紹介してください」

漁師「やだよ、自分でいけよ」

それでも我々が、不慣れな手つきで編んでいると、

「おいおい、だから、そうじゃねえんだよ」

「ここをこうしてだな」

「なんでえ、組合長！ 何教えてんだよ、あんた編むの早すぎてみんな分かんねえよ」

「ほれ、おれが教えてやるから見てろ」

気がつくと、あちこちで漁師さん達が網を触り、いじり始めた。

理想的な展開である。この場所、阿古漁港中棧橋を選んだ成果が早速現れた。

三宅島大学の本校舎内で講座を開いていたらこうはならない。三宅島大学に興味がある人はそこまで足を運ぶが、漁師さん達のような人達はまず顔を出すことはない。

島に飛び込まないと、島の中でものごとが機能することはない。阿古漁港中棧橋、ここは網にとって、プロしかいない場所へ飛び込むようなものである。この中棧橋につり下げられた網に対して、三宅島の人が当事者意識を持ってくれるものになるか、これからどんな物語が編み込まれていくのか“そらあみ”としてのトライアルはまだ始まったばかりである。

午後からは雨。室内で事務作業。落ち着かない天気が続いている。



そらあみ体験講座に参加し、今日も来てくれた田中さんに地元漁師さんが指導中

噴火前と噴火後

2012.10.09

今日は朝から雨。ここのところ三宅島は雨が多く、風も強い。やはり太平洋に浮かぶ島である。内地（日本列島）に比べて、太平洋からやって来る低気圧や前線の影響を強く受けるのだろう。中棧橋に行くと、使用場所を示す三角コーンが風でだいぶ動かされていた。かなりの強風である。聞く所によると風速 40m くらいは、島の人にはさほど驚かないらしい。冬になるともっと風は強くなり、海水が巻き上げられ潮の雨が降って、その雨が乾くと車は真っ白になってしまうと聞いた。

島に到着してから、人との出会いの流れで、ほとんど三宅島を回らずに制作に入ったため、今のところ阿古地区周辺でしか行動していない。滞在中、この後 1 人になる期間もあるので、生活に困らないように、商店や食べ物屋さん、ガソリンスタンドや郵便局など、どこに何があるのか島内の主要なポイントを、今年の 7 月に三宅島入りした三宅島大学マネージャーの猪股さんに案内してもらいながら、午前中は雨の三宅島を一周ドライブすることにした。

印象に残ったのは、どこまでも広がる海と、黒い溶岩、そこから伸びる立ち枯れた真っ白な木の幹群、そして全体を覆おうとしている緑の植物。木が枯れたのは火山ガスの影響だそう。生活していると、村役場から島内放送がよくある。内容は主に 2 種類。1 つは東海汽船の停泊場所や出港時間変更のお知らせ。もう 1 つは、火山ガスの濃度レベルの報告と注意である。高濃度地区もあったりする。窓を開けて運転していると、たまに温泉街で嗅いだことのある硫黄の匂いがする。それが火山ガスらしい。自分には何の影響もなく、温泉街と変わらないようにしか思えないが、中には高感受性者もあり、喘息になる方もいるとのこと。現段階では生活する分に、自分には何の問題もない。

三宅島は約 20 年ごとに噴火をしているそうで、前回は 2000 年、その前は 1983 年。島で出会ったたいがいの方はその両方を体験している。2000 年の噴火は島外への避難が必要となり、4 年半帰って来られなかった。噴火前と噴火後、何が変わったのだろうか。

島の人から聞いた話で印象的だったのは、島に戻ってきた時の印象は、山の形が変わっていたということと、人が減っていたこと。人が減った理由は、噴火で死者が出て多くの方が減ったのではなく、東京都内に避難して、そのまま島に戻らなかった人が多いそうだ。

逆に増えたのは、カラス、ネコ、カエル、カミキリムシ。ネコは飼い猫を放して島を離れたので繁殖したそうだ。カエルは噴火でヘビがいなくなってしまうから天敵がいなくなり増えたとのこと（今三宅島にはヘビがいらないらしい）。カミキリムシは立ち枯れの木が最高のエサであり繁殖場所となり噴火前の 2000 倍に増えたそうだ。カラスはよく分からないが逞しく生きたのだろう。

海はどんな変化があったのだろうか。こんど漁師さんに聞いてみようと思う。

“そらあみ”を介して場を開く

2012.10.10

今日で三宅島滞在（全 20 日間）の折り返し日。10 月 1 日に東京を出港し、2 日に三宅島入り、“そらあみ”は 21 日の完成を目指している。そして翌日 22 日には島を離れる予定である。残り 10 日。なんだか焦りがある。網を完成させる焦りではなく、島の人と向き合っているのか、そらあみを見てもらえるのか、関わってもらえるのか、といった焦りである。21 日以降の展示予定は今のところない。

3000 人いる島の方全員に何かしらの形で関わってもらおうというのは、この期間では不可能である。その理由から確実に漁師さん達に出会うことができる阿古漁港の中棧橋に場を設定したのだ。そして、その効果は徐々に現れつつある。

今日も、黙々と網を編んでいると、キタガワさん、続いてクニさんが編みに来てくれた。

キタガワさん「おい。進んでるのか？」

五十嵐「雨だったので、三宅島大学本校舎内で編んで、今日つなげに来ました」

キタガワさん「少しは進んでるみたいだな」

クニさん「全然生徒なんか来ないじゃないか。みんな知ってるのか？」

五十嵐「いちおう広報は役場を通していろいろしてるのですが、6 日にスタートしたので、まだそれほど浸透していないようで…。でも、何人かはたまに来てくれています」

いつものメンバー 3 人で編んでいると、気がつくと他の漁師さんが近くまで来て、軽自動車の窓から顔を出して、キタガワさんやクニさんに話しかける。

漁師さん「おい。カラスよけでも編んでるのか？ 誰だかが言ってたぞ」

キタガワさん「こんな派手はカラスよけなんてねえよ。むしろ寄って来ちまうだろうが」

漁師さん「なに編んでんだよ。仕事が違うだろ。笑」

キタガワさん「うるせえな。ほら、三宅島大学のだよ。アートだってよ。手伝えよ」

漁師さん「ああ。広報で見たよ。そらのやつだろ？」

キタガワさん「そうだよ。編めよ」

漁師さん「いや俺、網できないんだよ」

こんな具合の会話が人が変わって、次から次へとやってくる。どうやら徐々に噂になっているらしい。広がり方は、「どうやら、キタガワとクニ兄が三宅島大学で網を編んでいるらしい」という噂のようである。おふたりとの出会いがこの状況をつくっているのだろう。出会いと2人に感謝である。

その後も、「あしたは海が良さそうだから、金目（金目鯛）の漁の仕込みに来た」とか、「あそこの栈橋に潜ろうとしたらフカ（サメ）がいて、ビックリして足ヒレとゴーグルとを、うっぱなしちまった」とか、「突いた魚を腰にぶら下げて泳いで、上がったら頭しか残ってなくてよ、フカに食われてたんだよ」とか、「カンパチはどこにいるんだ」とか、「サワラを獲る仕掛けはどうしてる？」とか、「カサゴは穴にオス・メス一緒にいるから」とか、「あの船はスパンカー張れないから、船が上（風上）を向かない」とか、「群馬の友人にカンパチあげたら喜んでよ。あそこはフカ（サメ）も食べるみてえだしな。そんで、朝散歩なんかしてるとネギやら何やら持ってけてくれるんだよ。あっちは地面がたくさんあるからな」とか、とにかく延々と島らしい、漁師らしい話が展開していく。

こうして、栈橋に座り込んで黙って編んでいると、自分も漁師になった気分になる。でも決してそこには入れない感覚も同時に感じていた。だから黙っていたのだろう。網を編むことでしか、ここに自分は入れないのだ。網を編むことが、通行手形となり、漁師さん達の中に入れてにすぎないのだ。

今、この場には、網があって、編む人がいて、その周りに人が集って、会話が生まれて、夕日が紅く焼いた空がある。自分は、この状況に、どこか豊かさを感じる。そらあみのこの場があるから、キタガワさんとクニさんはここ中栈橋で珍しく（2人が一緒に何かをすることはほとんどないらしい）共同作業をしている。そこに漁師が、どんな目的にせよ集っている。

今、三宅島の阿古漁港の中栈橋にはそんな場が生まれている。網を編む意志があれば、今ならこの世界に入ってくる。その扉が“そらあみ”を介して開かれている。

扉が開いているのは残すところ、10日間である。



久々に3人がそろった



開かれた場





なんとなくそこにて、会話をしている



更に網を延ばしていく





まとめるとヨットの帆のようだ



師匠との再会

2012.10.11

今日は嬉しい再会があった。朝 10 時、自分に網の編み方を教えてくれた、言わば師匠である“じい”がそらあみを見に来てくれたのだ。この人との出会いがなければ“そらあみ”は生まれなかった。

出会いは去年の 6 月に遡る。三宅島大学のリサーチメンバーの 1 人として一週間ほど島に滞在した。その時、島のベテラン漁師として知られる“じい”と出会う。他のリサーチャーが島内を巡っている中、自分は滞在期間中、毎日じいの船小屋に通い、ひたすら網の編み方を習った。どうにか出来上がった網は 50 cm 四方の小さなものだった。網を編む所作とそこに流れる時間に可能性を感じた。その後、ワークショップスタイルで多くの人に参加できる、空に向かって網を編む“そらあみ”を考案し、京都府の舞鶴、岩手県釜石市の仮設住宅にて展開し、今回、はじまりの地である三宅島にもどってきたのだ。

三宅島で“そらあみ”をすることは自分の中では、“じい”への報告というのが大きな意味を占めていた。ところが、都内での事前打合せの際、その後“じい”の体調が急に悪くなり、もしかしたら会うことができなかもしれないと聞いていた。それでも、どうしても報告がしたかった。そして、見てもらい自慢したかった。

なので、“じい”の突然の訪問はとても嬉しかったのだが、実際に来てもらうと、再会の喜びと共に、師匠に見てもらうという緊張感も生まれた。

まずは、がっちり握手、一時は 36 kg まで痩せて情けなかったと話す“じい”は、確かに小さくなったように見えたが、漁で鍛えられた分厚い手のひらと、優しさの奥にある逞しい眼光は、あの時と変わらないものだった。ちなみに、現在、病状は落ち着き、体重も増えつつあり、回復に向かっている。

網を広げて、見てもらった。“じい”は手を伸ばし、網を掴み、少しだけ引き寄せ、一目一目、じっくりと見てくれた。じいは「あの時、編めたのはこんなに小さかったのにな」と指で四角を描き、笑顔を見せてくれた。そして「上等、上等」と一言。この一言が本当に嬉しかった。なんだかやっと一息つけて、ほっと胸をなで下ろした。

そして、“じい”に習った網が、“そらあみ”となり、いろんな土地の人と網を編み、人が交流する場となった、という話をした。じいは何度か頷いてくれた。そして、どこの土地の漁師さんも同じ編み方で、網を編むことで知り合うことができたと話すと、じいは「三角の網はないからな。網はみんな四角だからな」と、指で三角を作って笑顔で言った。

「じゃあ、じいは海に（釣りに）行くから。時間があつたら、あの場所において」「はい。ありがとうございます」



師匠の目が光る



あれからを報告中





氷を積み込んでから、もう一回行ってくると言って、飛び出していった。
自然と「いってらっしゃい」と声が出る



ここまで延ばすことにしました





最近、よくこの鳥がやってきます。鳴き声がかわいらしく、どうやらカップルのようで、よくおしゃべりしてます



美しい1日でした



新教授

2012.10.12

三宅島大学の“そらあみ”づくり体験講座に、ここ数日の間、キタガワさん、クニさんに続いて、新たな教授が就任した感がある。大洋丸のマサルさんだ。

頭の回転が速く豪快でどんどん前に話を進めることのできるキタガワさん、キタガワさんにはよく地元の漁師さんが話しかける。目が追いつかないほどの手元の動きで黙々と編み進めるクニさん、クニさんには見事な手さばきとその寡黙な姿に惹かれて一般の方が周りを囲むことが多い。そして、その2人とはまた全く違った魅力があるのがマサルさんだ。

マサルさんは、話をするのが上手。そして、編み方を教えるのがうまい。船を停泊させる場所が“そらあみ”の現場にほど近く、漁に出てない時間や、ダイビングのお客さんを眼鏡岩（近くのダイビングスポット）まで送る待ち時間に、編み方の指導をしてくれる。

はじめて編む人が、手をこまねいていると、側に寄ってきてくれて、楽しい会話と共に丁寧に教えてくれるのだ。マサルさんがいると、笑いが生まれ、場の雰囲気明るくなる。

こういった時、自分は全体を見つつも、黙って編むようにしている。漁師と一般参加者との間に、網を編むことを介してつながりが生まれている瞬間だからだ。

網を編んだり、冗談で笑ったり、三宅島の漁の話や、噴火の時の漁の話や、聞いたり、交わされる会話の内容は面白いものばかり。島に長く住んでいる参加者も、マサルさんとの会話を通して知らない三宅島に出会うことができる。

今日、マサルさんから聞いたイルカの話しよう。三宅島のすぐ近くに御蔵島という島がある。三宅島の南南東19kmに位置する島で、人口300人弱の小さな島、イルカが多い。観光客の流れとしては、イルカウォッチングをしたい人は御蔵島、釣りをしたい人は三宅島といった感じだそう。

以前は三宅島の近くにもイルカがいたそうだが、漁で獲った魚を上手に食べてしまうので、困った漁師さん達は、驚かしたりして追い払うようにしていた。そうしたらイルカは御蔵島の方へ移動したそう。

60年近く海へ出ているマサルさんはイルカのいろんな姿を見ている。イルカは賢いということは、なんとなく知っていたが、なんと“タコ”で遊ぶらしい。食べているのではなく、遊んでいるそう。口にくわえて泳いで、吸盤が引っ付くのが面白いのか、放り投げては、またくわえ、また放り投げる、というのを繰り返すらしい。イルカのタコ投げ遊びである。

他には、浮いているビニール袋などと、それをヒレに絡めて泳いだりするそう。抵抗が生まれるのが面白いのだろうか。イルカのビニール袋泳ぎ遊びである。



冗談交じりの会話も盛り上がる



夕方、小学2年生のはくくんが編みにきてくれた。差し入れに仮面ライダーチョコをもらった



網を編む理由

2012.10.13

「坪田地区に、毎日、網を編んでいる人がいる」そんな話を聞いた。これは会いに行かなくては。そらあみづくり体験講座の開始時間前までに戻って来られるよう、朝一番で会いに行った。

その方は坪田地区にある製材所にいるという。車を走らせて約 15 分、製材所を発見。車を止め敷地内を歩く。木造の平屋が敷地両側に延びる。左側の平屋には、たくさんの木の板が積まれていたが、長く手をつけていない様子であった。そして、右側の平屋の一番道路側に小さな休憩所のような場所があった。「おはようございます」とドアを開けると、部屋の中央に屋根まで延びる煙突のついたストーブがあった。ほのかに温もりのある空気から、部屋を暖めているのが分かった。

ストーブの周りにはソファが置かれており、その人は座っていた。「おはよう。今日は寒いからね」と、服をたくし上げて、いきなり腹巻きを見せてくれた。この人こそ毎日網を編んでいる筑波栄一郎さんだ。みんなからは“おおじい”と呼ばれている。御歳 89 歳。辺りを見回すと黄色い糸で丁寧に編まれた“すかり”という貝やテングサを入れる網袋や、編み針や、途中まで編まれた“すかり”をみつけた。これを毎日 89 歳の方が編んでいるとは驚いた。

更に、別の部屋に連れていってくれ、そこには大量の“すかり”が山積みにしてあり、おおじいの話では、「他の場所にもたくさんあるから好きなだけ持っていけ」とのこと。なにはともあれその圧倒的な物量に誰もが驚くに違いない。毎日編んで、もう何年くらいたっただろう。数百という数の“すかり”があるそうだ。材料は東海汽船が使い終えた、傷の入った古い太いロープをもったいないから解いて細くして、それで作っている。

坪田地区の筑波と聞いて、もしやと思い詳しく聞いてみると、自分に網の編み方を教えてくれたベテラン漁師こと“じい”の伯父さんにあたるという。この時点で自分にとっても“おおじい”となった。

おおじいに、何故編むのかと聞くと、時間ができた時に、手持ち無沙汰で編むという。ボケ防止にもなるし、と言っていた。確かに、おおじいは耳も全然遠くなく、受け答えも、それはもうしっかりしたもので、とても 89 歳とは思えない。「自分より年上の連中は、みんなおかしくなっちゃった。やっぱ、手を動かすのがいいんだな。でも、これ見ろ、(ズボンの裾をたくし上げる) このスネ、こんなに細くて、栄養もいってないからカサカサだよ。足が悪くて困る」確かに、足は細い。でも会話は本当にしっかりしているのだ。

何をきっかけに編みはじめたのかと聞くと、噴火で都内に避難した際に、島に帰れずに時間があるし、都内での生活が、なんだか不安で気を紛らわせるために編んだという。そして、避難先の近くに住む小学生達にあげたらみんな喜んだ、と話していた。

“おおじい”は噴火を 4 回経験している。昭和 15 年(1940 年)、37 年(1962 年)、58 年(1983 年)、そして平成 12 年(2000 年)。中でも 15 年の噴火が一番怖かったという。一晩で海に山ができたそうだ。



今朝は虹が出ました。下に見えるのが阿古漁港中棧橋。ここで“そらあみ”しています



おおじいの背中と大量のすかり





一度役割を終えたロープや紐が解かれ、大切に保管され、次なる役割を待っている



いくらでも持っていけど、おおじい





突然、編みはじめた

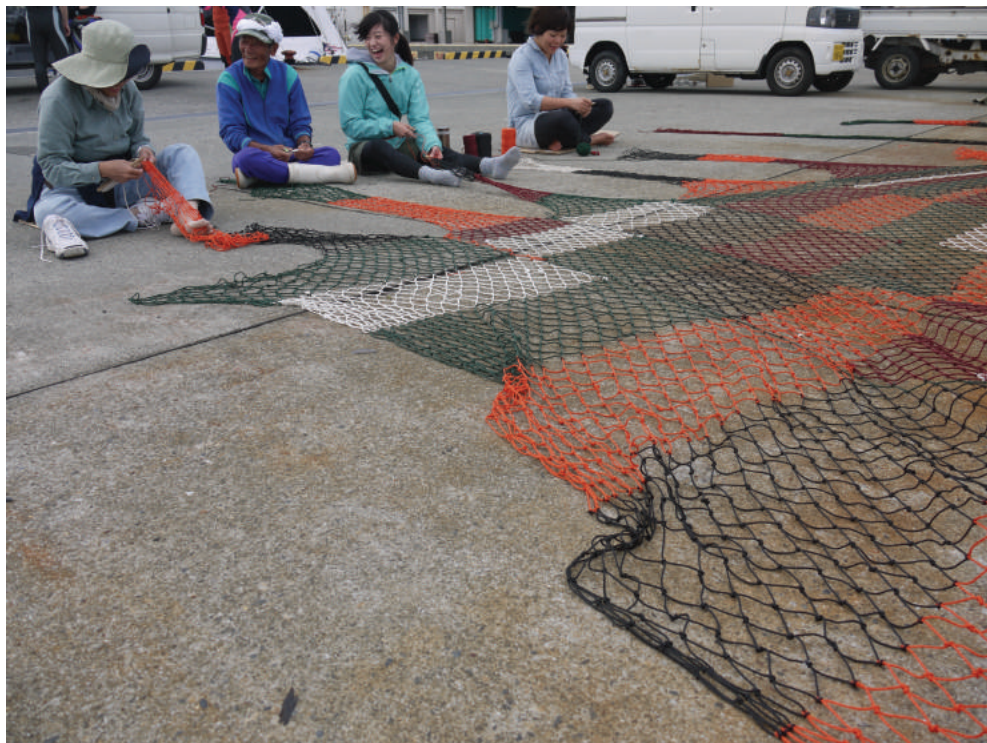


おじいにとって、三宅島とつながる行為なのかもしれない





時間と空間を越え、つながる場となっていく



かつて世界のどこかの浜辺にもきっと





網は見て覚える。指先に残る感覚が引継がれていく



島の時間を区切る船

2012.10.14

今日は日曜日ということもあり、そらあみづくり体験講座への参加者が多い1日だった。午前中は島外からきた観光客、午後は島内に住む住民といった参加者の顔ぶれだった。午前と午後、なぜこのような人の流れになったのかと考える。

島の時間軸を区切る存在は船（定期便）である。船は基本的に毎日同じ時間に三宅島にやってくる。朝の5時と昼の2時。人はもちろん、郵便物や、食べ物なども、この時間に船から島へ到着する。また、逆に島から船に乗り、海のむこうへ旅立っていく。島にやってくる人は、朝の5時に島に到着する人がほとんどで、日帰りもしくは数日過ごし、昼の2時の船で島を出る。

なので、今日の参加者は、午前中は観光客、午後は島民という人の流れになったのだ。特に帰りの観光客の多い日曜日の昼2時の便が出ると、島はすっかり静かになる印象だ。なんとなくだが、外向きの顔をした三宅島から、普段の三宅島の顔に戻る瞬間のようでもある。

海のむこうからやってくるものと海のむこうへ旅立つもの、人ともに島を出入りする時間が決まっているため、日々、栈橋は出会いと別れの舞台となる。島に暮らす人も、島に来る人もみんなこの時間を意識して島で過ごしている。

しかし、しばしば、その時間と場所の変更がある。それが面白い。海という人にはコントロールできないものに囲まれた島であり、そこを行き交う船だからこそその出来事である。

太平洋に浮かぶ三宅島は外洋のうねりの影響を強く受けるため、船が到着する港がよく変更される。波や風の向きによって、島の南西に位置する錆が浜港、島の北西に位置する伊ヶ谷港、島の東に位置する三池港、この3つの港のどれかになる。基本の発着時間から変更になる場合は島内放送が入る。「キーン♪コーン♪カーン♪コーン♪」「こちらは三宅村役場です。東海汽船からのお知らせです。本日の東京行きの定期便は海上不良のため〇〇港に条件付きで着岸します。乗船予定の方は〇〇時までに乗船手続きをお済ませください」といった感じだ。

漁師さんはもちろん、島のパン屋さんまで天気図などから、天気を読み、「明日はサビ(錆が浜)だな」とか「台風のうちねりが沖縄の方から来てるし、伊ヶ谷じゃないかな」といった予想を立てている。天気予報士がたくさんいるのだ。これもまた島の文化である。

自分が育った、人工物に囲まれ自然から切り離された千葉の埋め立て地では、そんな人達に出会うことはなかった。海の波にせよ、風にせよ、火山の噴火にせよ、自然という人にはコントロールすることのできないものに、日々、目を向けて、経験と情報と知識と身体感覚とを駆使して、自ら未来の状況を予想し行動する。自分には島の人達がたくましく見える。これから起きる地球の出来事を読み取ることができるからだ。

それは、文字を理解していないと本が読めないのと同じようなものだ。この星に生きるなら、この星を読めるようにならないと、その変化や予兆に気がつくことはできない。都市生活というものはそれに逆行しているように思える。自分も含め、生物としての軟弱さに驚く。そういった意味で、三宅島の人にとっては当たり前のことだが、感度の鈍った都市生活者にとっては、三宅島滞在は生物としての感性を磨く良いトレーニングの場とも思える。

三宅島に着いてから思考と身体感覚のバランスの大切さを再認識している。

まだずいぶん遠くだが、台風が近づいてきている。さてさて、数日先の着岸は、どこの港になるかな。南西からのうねりが強くなるはず。そう考えると伊ヶ谷港になるかな。



最近、島の漁師に間違われるようになりました（笑）

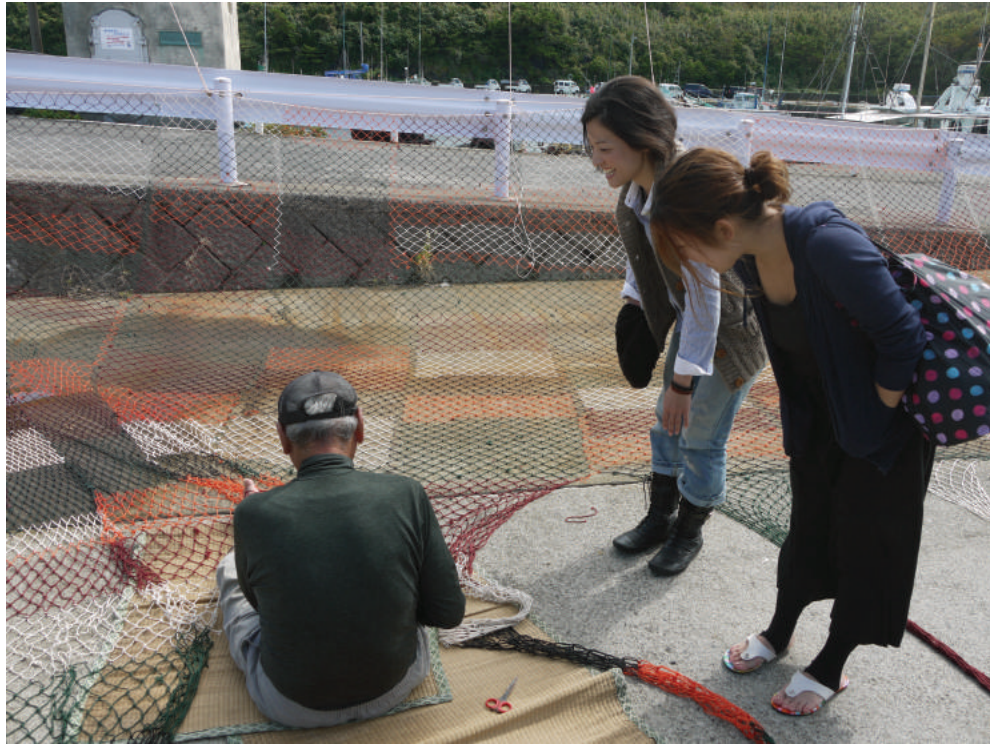


三宅島大学マネージャーの猪股さんも教えてあげてます



覚えた人からまだの人へ、自然と技術は伝わっていきます





出港時間が近づいてきました。クニさんに別れの挨拶。お礼の気持ちを伝える大阪からの観光客2人



観光客の皆さんは船へ。普段の島にもどる時間。我々はひきつづき編みます





お昼休憩。少し網を上げてみました



午後は島のみなさんと編みました





島に住んでいても、もちろんはじめて編む人がほとんどです



北東から急に冷たい風が吹きはじめました。暗雲が近づいてきたので少し早く切り上げました。お昼の青空バックと、夕方の暗雲バックと、網の見え方がずいぶん違います



定置に乗らないか？

2012.10.15

日曜日の昨日とは打って変わって静かな月曜日。そらあみの制作現場である阿古漁港の中棧橋もちらほらと漁師さんの姿を見かける程度の1日だった。

「おい。進んでんのか？」遠くから声がした。係留用ロープの修復作業をしている漁師さんからだった。はじめて話す漁師さんから声をかけてもらった。毎日、ここにきて網を編んでいる姿を見てくれていたというのがよく分かる瞬間だった。嬉しくなったので、近づいて話をした。

五十嵐「はい。だいぶ網が大きくなりました。今週末で完成する予定です」

漁師さん「三宅に来てどれくらいになる？」

五十嵐「10月2日に来たんで、2週間くらいです」

漁師さん「普段は何してんだ？」

五十嵐「あちこちの土地にいて、こういったことをしています」

漁師さん「フッ（笑）それで飯食えてんのか？」

五十嵐「どうにかこうにか」

漁師さん「定置（定置網の船のこと）に乗るか？」

五十嵐「ええ！？乗っていいんですか？」

漁師さん「おお、いいよ」

五十嵐「自分で役に立つんですかね？」

漁師さん「……………」

確かに、今日までの間にも他の漁師さんから「定置の網、編んでくれたらいいのに」と何度か半分ちゃかされながら言われたことがあった。おそらくではあるが、毎日網を編んでいたから、多少使えると思ってくれたのかもしれない。「半農半芸」という言葉を聞いたことはあったが、「半漁半芸」もありかもしれない、島暮らしかあ、悪くないな、などと一瞬妄想にふける。



話しかけてくれた漁師さん。係留用ロープの補修作業中



だいぶ大きくなりました。細長く編んだ網を1枚につなぎ合わせていきます





今週末、この空間に網が吊られます



三宅島、阿古漁港からの夕日。三本岳が見えます。とても良い釣り場だとか



そらあみ＝サッカー

2012.10.16

今日とはとにかく風が強かった。台風の影響なのだろう。明日到着する東京からの船は欠航となった。青空が広がり、天気は良いのに、風が強く、うねりが大きい。高台に上がって海を見ると、錆が浜港の棧橋を越えるような、大きなうねりが押し寄せて来ており、堤防にぶつかる低いドーンという音を1日聞いていた。写真で見ると分からないが、身体感覚としては、遙か彼方から確実に近づいてきている台風の存在を感じる。堤防があるとはいえ少し不安になる。

そんな天候の影響もあったのか、今日は1日1人で網を編んだ。途中、三宅村漁協参事の石井さんが車で横付けして、「おい。若い漁師さん。ずいぶん網が大きくなったな。風邪ひくなよ」と声をかけてくれた。この人も“そらあみ”を楽しんで応援してくれている人の内の1人だ。漁港を使用するにあたって、交渉での出会いからはじまり、近くを通る時は必ず声をかけてくれる。他にふらりと見に来る人と言えば、副村長もたまに来てくれ、夜は食事に誘ってくれる。副村長は1人で来て、そらあみをじっと見上げ、しばらく佇んでいる姿が印象的。あとは、教育長も来てくれる。子供の参加者が少ないことを気にしてくれ、たくさんの人に見てもらえるようにしたいと言ってくれる。

せっかく1人だったので、今回の滞在中に見た、三宅島の漁師さんがしていた編み方を思い出しながら、いろいろ試してみた。

プロジェクトの現場に1人であることには慣れている。今まで行ったプロジェクト現場のはじまりは大抵1人だった。自分の場合、土地で何かコトを起こす時、最初は1人で、単身土地に飛び込み、1人で何かをはじめ、徐々にその行為が伝播し、時間をかけて土地と人との関係性をつくりながら場に広がりをつくって、1つの風景として完成に向かっていく形が多い。

高校卒業までサッカーをしていたのだが、プロジェクト現場で1人の時は自主練習をしている時に似ている。サッカーで言うと、リフティングしたり、ランニングしたり、筋トレしているような感じだ。人が1人増えるとパスができるようになる。パスをするには、どこにどうボールを通すのか、イメージの共有が必要となる。そらあみの場合、網の編み方はボールの蹴り方みたいなもので、イメージの共有は“空にかかった状態＝完成図”である。サッカーではスペースを見つけ、見つけたスペースを瞬間的に仲間とイメージ共有し、ボールをそこにパスする。それが連続しゴールが生まれ、人はその連続するイメージの共有と実現に感動を感じる。そらあみの場合は、その連続したパスが、編み目となって視覚化される。1本の紐でつながっているから尚更そんなことを感じる。パスに個性があるように、編み方にも個性があり手跡として残っている。

そらあみをする事は「一緒にサッカーしようよ」と言っているのと同じようなものである。島の人とパスを交わし、漁師さんとパスを交わし（漁師さんパス上手い）、それをみんなに見てもらおう。そして応援してくれる人もいる。サッカーよりすごいのは、見ている人にもパスを出しちゃうところである。



束ねた網もだいぶボリュームが出てきました



ここで交わしたパスの軌跡





残り 4 日。試合時間だと、だいたい残り 15 分といったところか



パスも随分伸びました。
上から数えると 80 目あります



静かな 1 日

2012.10.17

網を広げて、編みはじめたが、1時間ほどしたら雨が降りはじめた。空には重く黒い雲がかかってきている。天候の回復を期待し、しばらく様子を見たが降ったり止んだりの繰り返し。仕方なく網をたたんで小さくまとめ、今日のそらあみを終え、三宅島大学本校舎にもどり、たまった事務作業を行った。近くに響く虫の鳴き声と、遠くから届く波の音だけが響いている。とても静かである。

10月20日の完成まで残すところあと3日。天気予報だと明日、明後日の天気も良くなさそうである。完成まであと少し、せめて週末だけでも晴れてほしい。

台風時のみ出会う風景

2012.10.18

今朝5時の三宅島到着の船で、サポートスタッフの塩野谷くんがやってきた。前日の三宅島入りを予定していたが、台風の影響で欠航し、一晩待機し、今朝となった。そして、今夜出発し明日到着予定の船は、次なる台風の接近で欠航が決まっている。塩野谷くんは台風と台風の間に唯一出港した船に乗り、ピンポイントで島に到着したのである。

“条件付き”という出港で、波が高ければ着岸できない恐れもあったが、到着時刻は予定通りの5時であった。着いた港は伊ヶ谷港。まだ暗い雨の中、車で迎えに行った。港に近づくと何台かのお迎えの車や、コンテナを引いたトラック、住民を乗せた村営バスとすれ違った。少し遅くなってしまったな。と若干心配しながら港に到着すると、船も迎えの車もいなくなった、高波が押し寄せ、波しぶきがあがる暗い港に、1人で立っている塩野谷くんを発見！見るからに取り残された姿である。お迎えのお母さんが来ない幼稚園児のようだ。悪気はないが、寂しすぎる姿に何故かニヤけてしまう。車を寄せ、すぐに乗り込んでもらった。思わず出た言葉は「よく来たなあ」であった。ほんとうに、よく来たと思う。波はひどくなかったか？とか、眠れたか？とか、気になっていろいろ聞いてみたが、本人は「いやぐっすり。眠れました」「三宅島着きましたね～」「久々の島、いいすねえ」と、まったく問題なかったようである。島で待つ人の気持ちってこんな感じなのかもしれない。

滞在先となる三宅島大学本校舎に戻り、互いの近況を報告。動き出したいが台風の影響でどうにもならない。仮眠をとり、午前中は事務作業。午後、塩野谷くんここまでの経緯を伝えに“そらあみ”のある阿古漁港中棧橋へ。あれ?!なんだかいつもと違う。船の位置が違うのである。ふと目をやると、大洋丸の船長であり、“そらあみ”づくり体験講座の教授でもあるマサルさんがロープを引っ張っている姿があった。

五十嵐「台風対策ですか？」

マサルさん「おう。船が波にやられて岸壁に押し付けられないようにな」

五十嵐「台風どうですかね？」

マサルさん「今から悪くなる。今夜から、明日の早朝までが山だな」

五十嵐「じゃあ明日の夜の東京発の船は出ますかね？」

マサルさん「どうかな。うねりが残ってたら無理だな」

普段は岸に寄せて係留してある船が、台風仕様の場合、適度な距離を保って、どこから力が加わってもロープが効いて、岸壁とも他の船ともぶつからないように見事に固定してあった。午前中に漁師全員で作業したそうだ。

中棧橋を挟んで反対側は縦横無尽に張り巡らされたロープが海面に浮かび、見たことのない光景が広がっていた。かなりの衝撃を受けた。こんなことが台風の日で起こっているなんて！ 知らなかった。

そして、雨がみるみるうちに強く降り始めた。編むこともできないので、塩野谷くんを車に乗せて、島内を案内して一周した。海に囲まれた三宅島だが、高台に登っても雲の影響で海が見えないほどの天気であった。

夕方、“そらあみ”を吊るしているワイヤーと電線が台風の強風で擦れないようにと、指導を受けた。高所のため自分たちで作業できないので、急遽、設置作業をしてくれた北川電気のキタガワさんに連絡。忙しく、台風も来ているのに、すぐに対応してくださり、若い社員の方が作業しに来てくれ、問題解決。とても助かりました。若い社員の方にお礼をし、キタガワさんにも電話で感謝の意を伝えた。自分と塩野谷くんは傘を差して作業を見守っていただけなのに、パンツの中までびしょ濡れになったほどの雨であった。

この後、台風はマサルさんの言った通り、夜から朝にかけて通過したようで、尋常じゃない風が吹き続け、三宅島大学本校舎の食堂にある大きな窓ガラスが風で押され、一瞬膨れたのが分かったので、急いで雨戸を閉めた。木と建物を揺らす音が一晩中響いたのだった。



係留ロープの張り具合を調整するマサルさん



船の四方からロープを効かせている



そらあみもお休みです





海面に張り巡らされたロープ



この白い灯台も波しぶきで見えなくなるそうです



所作と所似

2012.10.19

朝起きると、曇りガラスの窓の向こうに青空があるのが分かった。思わず窓を開ける。ビュー！っと風が吹き込んできた。まだ、台風の吹き返しが残っているようである。しかし、思ったよりも台風は早く通過したようで、朝から空は真っ青で清々しい。風さえ治まれば最高の天気である。

午前中は室内作業をし、風が治まるのを待って、昼過ぎから阿古漁港中棧橋へ移動し“そらあみ”を編んだ。風は多少残っていたが、徐々に弱まっていくのが感じられたので問題ない。なんだか久しぶりの雲1つない青空で気持ちいい。昨日到着した塩野谷くんに網の編み方を伝え、共に編み進めた。

日が陰る少し前にクニさんがふらりと現れた。クニさんは網専門の漁師で、言わば網を編むプロである。そして、なおかつ元組合長でもある。港の漁師さん達からの信頼は厚く、阿古の港の“おおじい”といった存在である。今も港にはクニさんの船があり、港に来ることがクニさんの日常のように感じている。何度も、いや、毎日のように、一緒に網を編んだが、クニさんとはいつも、「明日、何時に編みましょう」といった約束などしない。いつもふらりとやってきて、ものすごいスピードで編んで、切りの良いタイミングがくると、「温泉に行く」と言って帰っていく。そんな関係だ。

この時、塩野谷くんは初めてクニさんの編み姿と出会うこととなる。編み方を習ったばかりの彼にとって、クニさんの手際の良さと、その無駄のない正確な所作の見事さは、自分で編んでみて、はじめて、そのすごさが分かったと言っていた。網を引き適度なテンションをかける足の使い方。編み針を返しつつ紐を送り出す右手の動かし方。編み紐をつまんで結ぶ位置を調整する左手の動かし方。それら全ての動きを連動させる上半身の、細かく左右に揺れるリズムの作り方。圧巻である。しばらく、クニさんの編み姿を1つのパフォーマンスを眺めるように真剣に見つめる塩野谷くんの姿があったのが印象的だった。そりゃそうだろう。それなりに編む経験を積んだ自分の4倍速くらいで編み進めていくのだから…。 “漁網を編む”という修練の積み重ねは、やがて、当人が無意識のうちに、人を引きつけるほどのパフォーマンスとしての力を持つものとなったのである。

しかし、その所作はどこから生まれたのだろうか。編み方をどこで習ったのですか？と漁師さんに聞くと、皆必ず「見て覚えた」という。遥か昔に世界のどこかの誰かが魚を獲って生きるために網の編み方を考え出し、それを見た別の漁師が網の編み方を見て覚え、それが海伝いにどんどん広がり、網は世界中に長い時間をかけて“見て覚える”を繰り返しながら広がっていったのだろう。

その土地の環境で生きるために修練された日常生活の所作から、網という造形物や、編むという動きの型が生まれ、その制作であり労働環境から労働歌や合の手が生まれる。そして、それらはさらに結晶化され、民芸品や美術作品、舞踊や祭踊り、民謡や歌、といったものになっていった。

そしてそれらは現在、伝統工芸、伝統舞踊、古典芸能と言われるような文化の遺産となっている。



はじめて網を編む塩野谷くん



所作を観察する





所作をまねる



所作を修練する



風景をつかまえる

2012.10.20

明日は発表会を行うため、今日がそらあみづくり体験講座の最終日。土曜日ということもあり、朝から数人の参加者が集ったので、全体感を把握するため、一度、編んだ漁網を空に引き上げた。両脇がたるんでいる。空にピンと網を張るために両端と下辺のロープ処理が必要である。でもそれはこっちの都合である。時間のない中来てくれた参加者の方から編み方を覚えたいという声があったので、午後にロープ処理の作業をすることにして、午前中は編みはじめから、みんなでもう一度おさらいしてみた。遠くで見ていた漁師さんが、編みはじめが気になったらしく、寄ってきて最初は離れて観察、途中から一緒に実践しながら、編み方の違いを検証してくれたり、三宅島のそらあみらしい時間が流れた。

お昼休憩のあと、足りない部分を編み足し、両辺と下辺のロープ処理をし、再び空に漁網を引き上げ、全体のバランスを見ながら網の目が均等に広がるようにテンションをかけ、完成！

その後はしばらく“そらあみ”と、そらあみの向こう側に見える三宅島の風景を観察した。今朝、島に到着した東京文化発信プロジェクト室の大内さんが言う。「これって見え方が面白い。見る角度によって見え方が違う。斜めから見ると色が濃くなり、正面から見ると見えなくなったり、なんか、虹やオーロラを見ているみたい」同じ船で到着したアーティストのEAT&ART TAROさんも、別のタイミングで「見えたり見えなかったり、なんか虹みたいだね」と同じことを言う。

そして三宅島で“そらあみ”をつくったロケーションは表からも裏からも歩きながら眺めることができ、遠くに見える土地の風景にそらあみの色が馴染んで消えたり現れたりするのを体感することができる。写真では伝わりづらく、肉眼で見る時の見え方の変化の面白さが、この“そらあみ”という作品のひとつの魅力としてあるということを再確認した。

そらあみの色は、時間と共に移り変わる三宅島の風景をとらえ続ける。白は雲をとらえ、緑は山をとらえ、黒は溶岩をとらえ、オレンジは夕日をとらえ、カッチは焼けた漁師の肌をとらえる。四角く編まれ構成された色の網は時に浮かび上がり、時に馴染んで消えて見える。

“そらあみ”はそこにあるのにないようで、そこにあるのにあるような、虹やオーロラのような見え方をする。

そのことを“そらあみ”のはじまりの島、三宅島にもどって強く確信した。



引き上げてみる

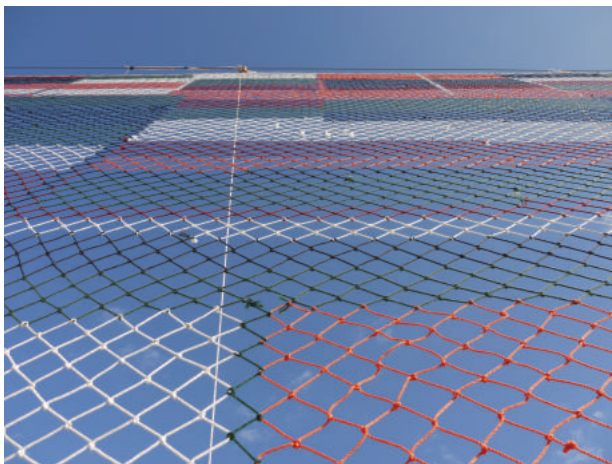


漁師さんも参戦。三宅島のそらあみらしい風景





左：長年、編み続けてきた人 右：昨日から編みはじめた人



青空に栄える



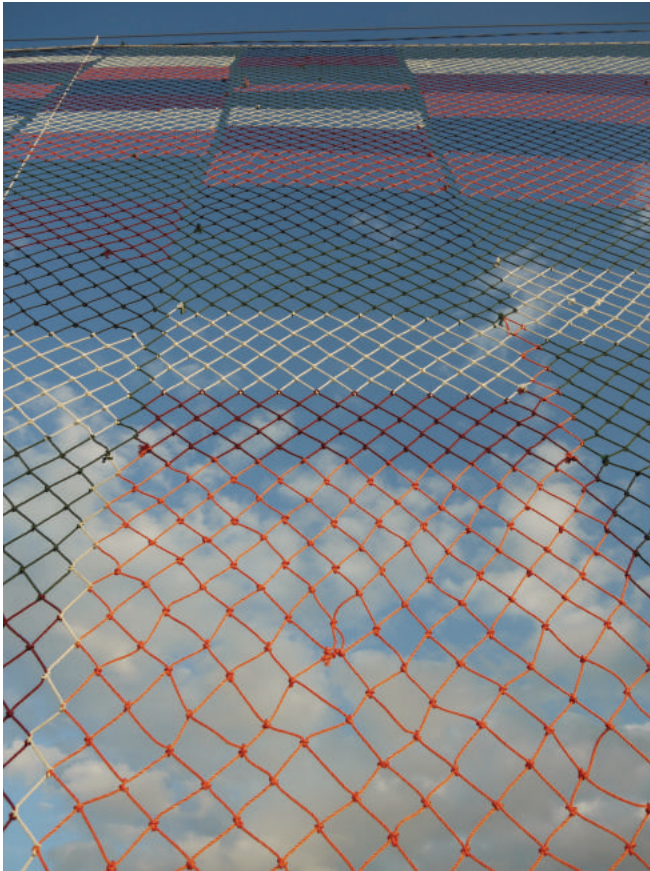
最後の仕上げ





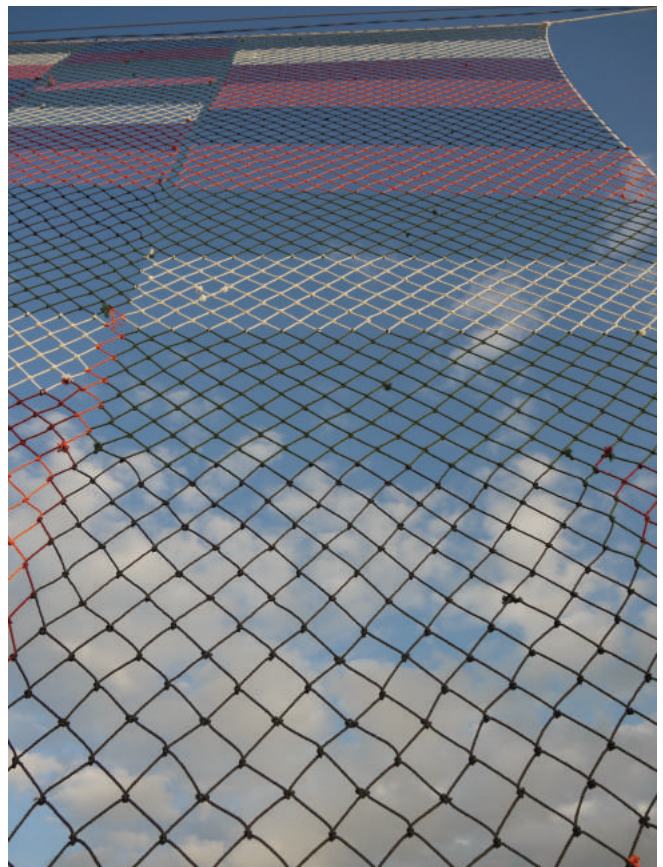
完成！ 風景から飛び出す部分と、風景に馴染む部分。普段の風景の見え方が変わります





同じ雲（↓下の写真）も
網目の色によって見え方が違います

同じ雲（↑上の写真）も
網目の色によって見え方が違います





クニさん登場。完成したそらあみを振り返る



2人で見上げた。

五十嵐「楽しかったですか？」

クニさん「おう、こんな大きなの編むことないしな」





ここは編み方間違っていないけど、長さがちがうな（笑）



クニさんは今日も温泉に向かうのでした。この人がいなかったらできなかった。
ありがとうございました！



“そらあみ”のこれまでとこれから

2012.10.21

三宅島大学そらあみづくり体験講座最終日は発表会という形で締めくくった。最初は本校舎にて、このブログをプロジェクションし、20日間の三宅島での滞在活動の報告を行う。その後、本校舎から約5分程度の距離にある中棧橋へ、角度や距離によって見え方の変わる“そらあみ”を眺めながらお散歩するといった流れで約2時間の講座を行った。参加してくれた島の方々や、今朝到着した東京文化発信プロジェクト室の方々などの皆さんにお集りいただき、天気も良く、和やかな雰囲気で行われた。

「三宅島はどうだった？」その質問に対して振り返る。

“そらあみ”の今までの流れとこれから（0. 三宅島→1. 舞鶴→2. 釜石→3. 三宅島→4. 浅草）を考える。

（0. 三宅島）

去年6月のリサーチプロジェクトで三宅島に行っていなかったら、今の“そらあみ”はない。島のベテラン漁師である“じい”から習って最初に編めたのは50cm四方程度の小さな網だった。この時は、基本的な編み方を学び、実体験を通して網を編む行為が参加型アートプロジェクト（ワークショップ）として機能する可能性を感じていた。

（1. 舞鶴）

それを京都の舞鶴にて、ワークショップ形式で空に向かって1枚の大きな網を編むというスタイルとして確立した。編まれた網は、現地で行われていた「種は船～航海プロジェクト from 舞鶴」の中で、風の抵抗を受けずに種の形をした船のフォルムを出す役割を担った。その時は、風は受けないが、参加者の想いを受けて力に変える帆のような存在に感じた。網は、現在、水と土の芸術祭に展示してあるTANeFUNe（朝顔の種の形をした船）の一部として展示されている。

（2. 釜石）

その後、岩手県釜石市の仮設住宅にて、津波で船を流され漁に出られない漁師さんや、仮設住宅で暮らす方々と“そらあみ”を行った。この時は、元々は別々の場所に住んでいた人達が、網を編むという共同作業を通して、開かれた場が生まれ、最終日には漁師さんが用意してくれた魚を、お母さん達が調理し、その仮設住宅でははじめての宴会が開かれ、互いに互いを支えるための人のつながりが生まれた。この時編まれた“そらあみ”は、現在もその仮設住宅のシンボルとして設置されている。

（3. 三宅島）

そして今回、自分が網と出会った地である三宅島で“そらあみ”を行い、いくつかの事を確認することができた。まずはじめに、師匠である“じい”にこれまで各地で展開したそらあみの報告ができたことが、重要だった。そしてそれは島で習った網を“そらあみ”にして島に返すという、島への恩返しでもあった。

発見と出会い、作品としての成長があるのか、新たな挑戦が始まる。

三宅島で網に出会い、舞鶴で人の気持を受け走る帆になり、釜石で人をつなぐ場となり、三宅島にもどり世界の見え方をずらす窓となった。次は浅草神社、神社は日本人の精神文化をつないできた場所である。神社の次は世界を意識する。世界は海でつながっている。網は海伝いに広がってきた。網もまた世界とつながっている。

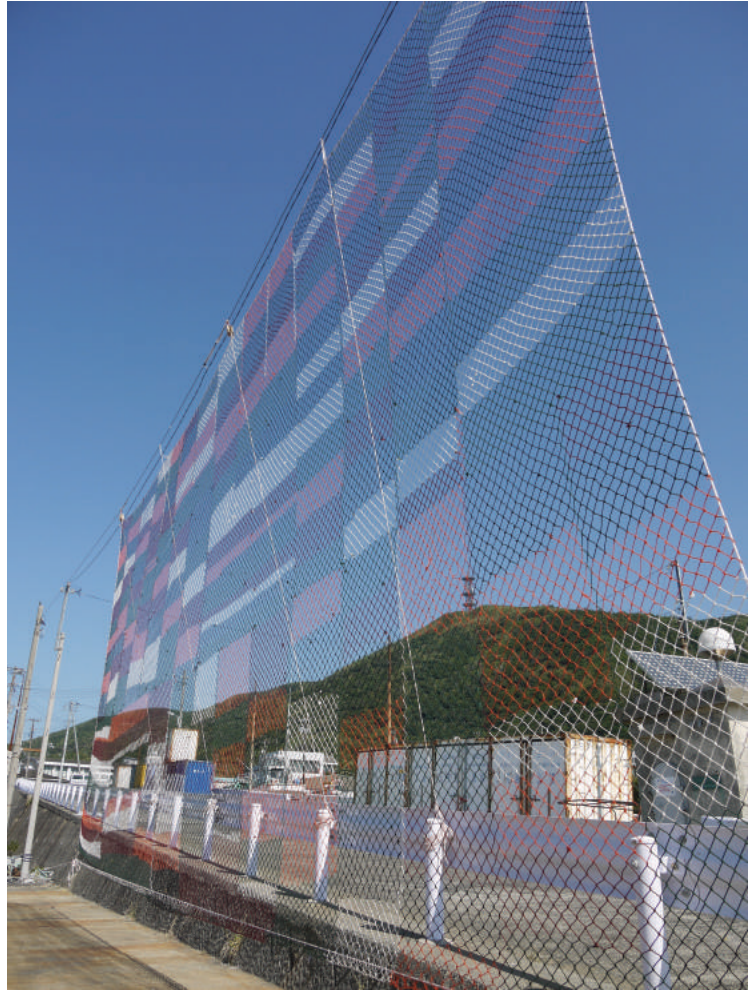
“そらあみ”は土地との出会い、人との出会いを重ね、確実に成長していつている。ここでの20日間のトライアルはこれで終了。三宅島という土地と、島で出会った、たくさんの一人一人に感謝している。



そらあみの前で、発表会に集まってくださった皆さんと記念撮影



快晴でした！

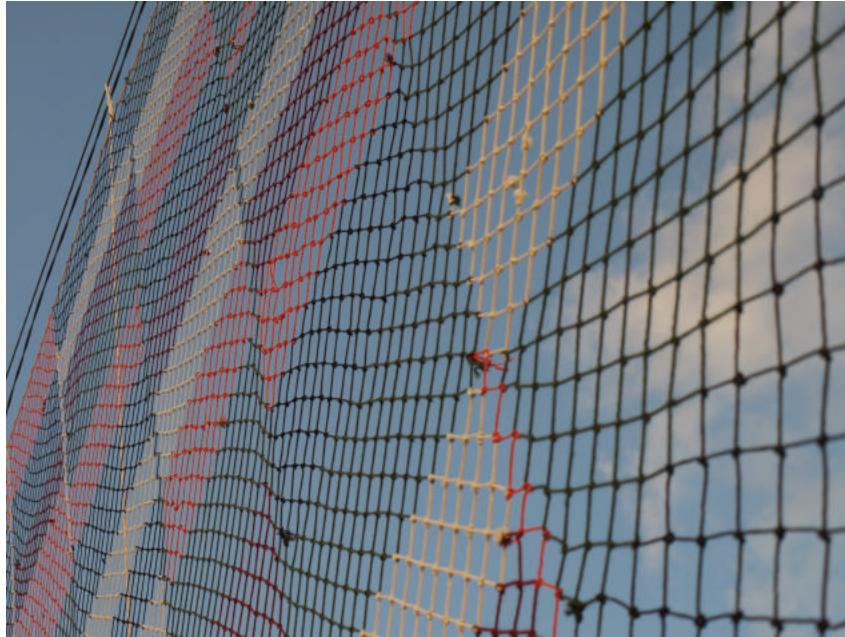


11月の終わりまで設置しています





点が線でつながり、面になりました。点から線、線から面。一次元から二次元、二次元から三次元。そのむこうに時間が流れています



三宅島の夕日とそらあみ。いざ浅草へ



三宅島から浅草神社へ

2012.10.22

荷物をまとめて、掃除、ゴミ捨てをして、20日間お世話になった三宅島大学本校舎（御蔵島会館）を後にした。

三宅村役場へ行き、三宅島大学の発起人である池山副村長に、出力したこのブログをレポートとして提出し、滞在活動を報告。「島でまなび、島でおしえ、島をかながえる。」という三宅島大学のコンセプトに対して、島の漁師さんに習い、島の漁師さんを巻き込みながら展開し、漁網越しに見える島に別の視点を提示したといった意味で、今回の活動を評価してもらえたように感じた。網で商品開発という提案もあった。他にも話はいろいろ展開した。そんな中、副村長の話で興味深かったのが、地方を変えるのは「よそ者、若者、馬鹿者」である。という話だった。

自分も含め、三宅島大学をきっかけに島に来る人は、まさに、よそ者であり、若者であり、馬鹿者である。去年の9月に開校してから約1年。今回、実際に三宅島で滞在活動してみて、「三宅島大学」という言葉は、だいたい島の人に浸透していたが、その中身がまだまだ伝わっていないのがよく分かった。

こういった活動は地味で時間がかかるが、確実に1人ずつ伝えていくことが重要である。地道に継続していくことが求められる。代理店の事業のように、分かりやすく打ち上げ花火のようにド派手に事業を行うことは簡単だが、それは一過性のものにすぎず、土地への定着や意識改革は難しい。

自分が、三宅島で網に出会ったように、これから、この島に出会い、はじまる物語が必ずある。

三宅島大学はいつまで続くか分からないが、継続するべきだと自分は思う。三宅島大学の本当の価値が伝わるのは、まだまだこれからである。よそ者、若者、馬鹿者が島に出会い、島に眠る宝を見つけ、それをまずは島の人と楽しみ、そこから世界に発信していく。自分は各地で網を編む時、必ず三宅島の話をしてきた。この後すぐに“そらあみ”を行う浅草神社でもまた、三宅島の話をするだろう。

島を出る船は14時と決まっている。残された時間で、お世話になった方々に挨拶まわりをした。最初は制作場所として、阿古漁港中棧橋を快く提供して下さった漁協の皆さんにご挨拶。石井参事は「東京出張か？次はいつもどって来るんだ？」と嬉しい言葉をくれた。

設置と制作で、本当にお世話になったキタガワさんとクニさんに残った編み紐一束を、それぞれ1つずつプレゼントしようと電話をすると、キタガワさんは船で漁に出ており、海の上にいる。電話でお礼を伝え、プレゼントは後日、三宅島大学本校舎に回収に来てもらう運びとなった。キタガワさんは「設置してる間は、俺が見といてやるから」と最後まで男らしい一言をくれた。クニさんは連絡先が分からないから、会えない。と思っていたら、たまたま港の側を歩いているクニさんを発見！お礼を伝え、編み紐を渡し、握手を交わした。クニさんは「またおいで」その一言だった。



東京文化発信
プロジェクト